

イスラエルが「主の過越」(出エジプト 12:11)をもって、エジプトの苦難から「脱出」出来たのは、彼らが主のもとにあり、銘々が主の言葉を信じて従い、一体化され、主の言葉に服従した証しの一大事件だった。

その時、彼らはエジプトを奴隸の家(13:3)と呼んだ。

イスラエルがエジプトに住んでいた期間は430年、そこから出た一行は壮年男子60万人(12:37)、手に持ったものは酵母を入れないパン菓子だった(12:39)。この時、主は御言葉を各自の腕と額に付けて記憶のしるしとし主の教えを口ずさむことを教えられた(13:9)。

此処に歌の形をとった祈り「海の歌」(15:1)「主に向かってわたしは歌おう。主は大いなる威光を現し、馬と乗り手を海に投げ込まれた。主はわたしの力、わたしの歌、主はわたしの救いとなって下さった。この方こそわたしの神。わたしは彼を讃える」がある。

歌を媒介して彼らが神に向かった讃美歌は古く、復活祭の第3朗読の後に歌われた。それは女預言者ミリアムが小太鼓を手にするると他の女たちも彼女の後に続き、「主に向かって歌え、主は大いなる威光を現し、馬と乗り手を海に投げ込まれた」(15:21)と。

旅立った一行はモーセに不服を出す。荒れ野を行く者に水が無かった(15:22,17:1)。しかし、癒す主はマラ(苦い)の水を12の泉と70本のナツメヤシをもって生かし(15:27)、コエンドロの種のように白く蜜の入ったウエハースのようなマナ(16:31)で以後40年間イスラエルの旅を支えた。

民は三月目にシナイの荒れ野に到着し、天幕を張った。イスラエルは其処で山に向かって宿営したのである。

山は神の顕現がなされる場所。ときにシナイ山は全山煙に包まれ、主が火の中を山の上に降りられた。煙は炉の煙のように立ち上り、山全体は激しく震えた。

「モーセは民のもとに下って行き、彼らに告げた(19:25)」。「神はこれら全ての言葉を語って、言われた」とモーセ自ら「十戒」を告知した(20:1~17)。「あなたの神」はエジプトを脱出させた神で、モーセに神の意思表明をし、人格的な交わりに入れた。

十戒の内「神を信じる」信じ方(3~11節)、「人を愛する」愛し方(12~17節)が明らかになる。

サドカイ派を言い込められたイエスにファリサイ派の律法の教師がイエスを試そうとして質問した(マタイ 22:34~40)の事件がいみじくも集大成となる。

十戒は、ユダヤ人であるイスラエルへの形式的、儀礼的な教えでも無ければ信仰者へのお題目や型通りの注意事項でもない。

信仰者が此れに命懸けで拘り、命の重さにおいて受け止める時その真の意味が生きて働く。聖書の言葉を信じる者は、これに懸かる。

十戒によって神を信じ、人を愛するイエス・キリスト信者は、このどちらもおろそかにしては成り立たぬ。

人を愛さないで神を信じていれば良いのでもなく、人の問題との関わりを持たなければ例えば優しいとか親切ならば神が信じられなくとも良いのでもない。

此処で「戦時下の日本聖教会(1941.6.14、日本基督教団参加教派第6部)の軌跡」を思わずにはいられない。